

2025年度 鶴間小学校の学校経営の重点

【町田市教育プラン 24-28】より

(教育目標) 自ら学び、あなたと学び、ともに創る町田の未来 ⇒ 「学び続ける力」

(基本方針Ⅰ) 「未来を切り拓くために生きる力を育む」

(基本方針Ⅳ) 「地域とともに学ぶ力を高める」

学校経営の重点

【人と人との繋がりの中で、生きる力の基盤を定着させる学校づくり】

学校経営の3つの重点目標

(1) 重点目標① — 【目指す児童像】

【本校の教育目標】

◎自ら考え、努力する子供

●思いやりのある子供

●体を大切にする子供



◎ **主体的に学び続ける子** ⇒ **知** 教わることや教えることが好きな子
—「自学自習」の姿勢で、主体的に学び続ける児童の育成—

※ ☆ 鶴間小の子の3つ「生きる力」 = 「**◎なく**」

地域コミュニティの一員として、郷土を愛し、様々な形で地域とつながろうとする子

○「確かな学力の定着と学習意欲の向上」のための具体的な取組

- ・ノート指導の徹底、高学年での教科担任制、思考力・判断力・表現力等の活用する力を育てる。
- ・朝学習・ベーシックタイムによる基礎の定着(ベーシックドリル+Qubena 活用)
- ・ICT 機器を活用した授業
- ・地域の人材・教材を生かし「本物」に触れる。
- ・家庭学習の定着を図る。
- ・外国語授業の充実、専科による授業、放課後英語教室等

一人一人の子どもに寄り添い、学ぶの意欲を育てる学習指導

- ・生きる力のもとになる基礎学力「読み・書き・計算」の確実な定着
- ・ユニバーサルデザインの視点による授業改善と学習規律の確立
- ・学びに向かう力や人間性を高め、集中して課題に取り組める児童の育成
- ・一人一人の児童の特性や学力に配慮した個別最適な学びの実現
- ・放課後の補習などによる、誰一人取り残さない指導の徹底
- ・発達段階に応じたタブレット端末の有効活用と、情報モラルの徹底+

～ ● 「自学自習」の心を育てるために

- ・宿題提出の徹底と未提出児童の把握、必要に応じての個別指導・支援を推進する。
～未提出、未実施を放置せず、家庭との連携、学年や管理職との相談で解決を図る。
- ・学習用具の準備や宿題など、授業での学びを補完するための家庭学習を定着させる。
～家庭との連携を深め、学習用具の不備を理由に、授業に参加できないことのないように配慮する。
- ・体験的・課題解決的学習を計画的に実施し、学ぶ意欲・追求する意欲を育てる。
～教師が主導し、ボランティアコーディネーターと連携を図りながら、地域の教育資源を活用し、地域や社会とのつながりを大切にしたい、開かれた教育課程の実現を目指す。

○ 「読書好きな子の育成」のための具体的な取組

- ・朝読書、読書週間など本好きにする取組、・家庭での読書の習慣化につなげる取組
- ・隙間時間読書の推奨・図書ボランティア、保護者、地域の方による読み聞かせの充実
- ・図書室及び学級の蔵書の充実

～ ● 読書指導の充実及び各教科等における学校図書館の活用

- ・国語の読みの力を育成するために、読書活動を重点化し、低学年での文字習得や読み方指導を徹底すると同時に、図書館で本に親しみ、様々なジャンルの本と出会う機会を増やす。
- ・中学年以上では、学校図書館を活用した読書活動や教科横断的な調べ学習を進めるためのカリキュラムマネジメントを行い、児童の集中力・想像力・国語力を涵養する。

○ その他

～ ● 子どもたちの「自己肯定感」を高める工夫

- ・丁寧な書字の指導、学習の積み重ねを表すノート指導の徹底を図り、学習の成果を保護者とも共有しての評価を行う（担任のコメントや模範ノートの紹介など、学年・学級単位で評価を行って賞賛）。

● 相手のことを考えられる子

⇒ 徳 どんな命も大切にできる豊かな心をもった子

—豊かな心と「自主自立」の精神を兼ね備えた児童の育成—

※ ☆ 鶴間小の子の3つ「生きる力」 = 「つむぐ」

友達と関わる中で、自他の存在や生き方を価値あるものとして大切にできる子

○ 「豊かな心の涵養」のための具体的な取組

① 「規範意識の醸成」

- ・道徳授業の充実 ・いじめ防止基本方針の周知と実施 ・SNS ルールの徹底

① 「協力し合える人間関係と豊かな情操の育成」

- ・自己肯定感の向上の取り組みの実施
- ・発表の場の設定(運動会、学習発表会等の行事)
- ・集会発表、クラブ発表、歌や合奏の発表(卒業コンサートや10歳の誓い含む)、作品の発表等
- ・異学年交流(教科学習での異学年交流、行事での交流、幼稚園・保育園・中学校等異校種交流)
- ・生き物や自然とのふれあい(栽培活動、飼育活動、動植物とのふれあい)
- ・ものづくり体験の実施(図工、家庭、生活等教科内。総合的な学習など)
- ・素晴らしい作品や演奏の鑑賞の機会の設定(作品展、書き初め展、夏休み作品展)

1. みんなで見守り、みんなで寄り添う生活指導

- ・Plan・Do・Check・Actionで、全職員の協力による声かけ・見守り・徹底・評価を実践する。（小さな成長も大きく認め、自己肯定感を育てる。）
- ・看護当番による、登校時、休み時間、清掃時間、放課後など、「いつも先生がそばにいる見守りと声かけの生活指導」を徹底する。
- ・週末の生活指導夕会での情報共有と生活目標の設定（看護当番の引継ぎ）、児童の生活実態を把握し、予防的な生活指導を推進する。
- ・複数の特別支援コーディネーターによる、学級や学年の枠を越えた配慮児童への対応策を協議し、学校生活の全体の安定を図る。
- ・不登校傾向の児童や登下校時に問題の起こりやすい児童には、最優先に個別の寄り添いをチームで進めていく。

2. 学年全体で子どもを育てる学年経営

- ・学年会の日常化と、副担任や専科・サポートルーム担任との学年会を実施する。
- ・担任各自の特色・個性を認め合い、できるだけ、共通の教材や指導法を実施できるように、分担したり、情報交換をしたりする。
- ・良いところは学年で共有し、弱いところはみんなで支え合う一枚岩の学習指導・生活指導を徹底する。
- ・児童・保護者の問題には、その背景を理解し、いつも複数対応であたる学年の連携を強化する。
- ・学年集会・学年遊び・学年体育の実施、少人数指導の活用を進める。
- ・教科担任の授業や専科授業の安定に向けて、担任ができる指導として、忘れ物の補助や教室移動時の引率だけでなく、授業開始時、授業中などの見守りや授業後に自己反省させるなど、支援体制を整える。

3. 楽しく「自主自立」の心を育てる、みんなが主役の特別活動の充実

- ・「より良い鶴間小学校にするために、自分たちにできること」を考える自主的活動を推進する。
- ・たてわり班活動の充実と、すべての児童が活動、活躍できる集会を実施（リーダーとしての6年生の育成）する。
- ・「あいさつ」「言葉遣い」「廊下歩行」などの啓発運動（「鶴間しぐさ」）について、生活指導部が中心となって推進する。
- ・学校行事における「実行委員活動の充実」や学年活動について、できるだけ実行委員による自主的な活動を取り入れる。自主的な目標の設定と児童による評価や反省など、児童が意見や考えを発表する場面を多く設定し、先生に言われるからやるのではなく、自分たちでよりよい学校生活をつくっているという自治意識を、早い段階から育てていく。

● 「体をきたえる子ども」 ⇒ 体 決めたことを最後までやり抜く子ども
— 心身ともに健康で常に全力を尽くす児童の育成 —

※ ☆ 鶴間小の子の3つ「生きる力」 = 「らぬく」

様々な学びを通して、主体的な判断力と柔軟な対応力を身につけ、変化や困難を乗り越えられる子

○ 健やかな体の育成（「体力の向上、スポーツ好きな児童の育成」）のための具体的な取組

- ・校内研究による体育の授業改善。運動の日常化の推進。
- ・外部講師を活用した運動教室等の実施
- ・1校1取組の実施（つるっ子ランニング）
- ・連合体育大会を目標とした6年生の練習

1. 健康な体をつくる基本的な生活習慣づくり

- ・「早寝、早起き、朝ごはん、歯磨き」に取り組み、自ら健康な生活をしようとする生活習慣を育む。
- ・安全でおいしい給食の実施と、食育による生命尊重の教育を推進する。

2. 校内研究「体を動かす楽しさを味わえる児童の育成」—器械運動系領域の授業づくりを通して—

- ・苦手意識が強い器械運動の学習において、技を局面に分けた技能分析を行って、場の工夫を進める。
- ・掲示物やICTを活用しながら、児童に技のポイントやコツが「わかる」ための授業の改善を図る。
- ・技が「できた」という達成感を味わわせるために、自分の課題やその解決方法が「わかる」ための手立てを考えた授業づくりを推進する。
- ・校内研究を通して、きまりを守り、友達と関わり合って運動する児童の育成を目指す。

3. 体力向上のための日常的な運動習慣と環境整備

- ・ マラソンやマラソンなど、体育的活動を充実させ、全校体制で体力づくりに努める。
- ・ 教科担任制や学年体育を活かし、学級間の体育授業の格差解消を図る。
- ・ 体力テスト結果の分析を踏まえて、体力テスト種目を日常的に行う。
- ・ 運動会や連合体育大会を成功させ、スポーツを楽しみ、体力向上を目指す心を育てる。
- ・ オリンピック・パラリンピックレガシー教育によるフェアプレー精神を育成する。
- ・ 校庭の芝生を維持し、活用していくための体制づくりと環境教育を推進
- ・ 芝生の維持管理と活用を念頭に置いた体育授業の計画や、休み時間の遊びを推進する。

(1) 重点目標② — 【めざす学校像】

【学校経営の重点】

人と人との繋がりの中で、生きる力の基盤を定着させる学校

【大前提として】

○安全・安心の学校生活

すべての傷病や交通安全など、児童の健康や安全の管理を徹底し、各種感染症予防や感染不安への対応を継続しつつ、児童の日常生活をきめ細かく見守るとともに、町田市教育委員会の様々な施策にも迅速に実施・徹底し、児童の身体も心も守っていける学校を目指していく。

○保護者・地域との信頼関係で築く安定した学校生活

学校と家庭が密に連携しながら、「主体的な学び」の姿勢を育み、学校生活の安定を図っていくためには、学校と保護者との強固な信頼関係が不可欠である。また、コミュニティスクールとして、学校運営協議会の理解・協力を求めていくために、的確な情報発信と適切な情報共有を図り、家庭・地域に開かれた学校経営を行う。

1日の大部分を占める学校での生活が、全児童にとって「安全で、安心できる安定した」ものになるよう、学校は、寛容性のある家族のような温かい愛情で児童一人一人に寄り添い、常に問題を未然に防ぐ危機管理意識をもち、何事にも全教職員の総力を結集して、教育活動に取り組んでいく。

○「安全意識・危機回避能力の向上」の具体的な取組

- ・ 教室での一声指導の充実
- ・ セーフティ教室、歩行訓練、ネットマナー教室など外部講師と保護者を招いた指導の充実
- ・ 細やかなメール配信による注意喚起
- ・ 放送などによる、全校への随時の指導

学校に関わるすべての人を大切にし、
地域に愛されるコミュニティスクール

— 子供たちにとって一番の場所になるためにめざす3つの学校像 —

【具体的な学校イメージ】

◎ 子供たちが縦にも横に繋がっている学校

- ・ 「わからないことをわかる」、「できないことをできる」ようにしてくれる先生たちがいて、みんなでいっしょに勉強したいと思える学校
- ・ わからない、できない子供に対して、粘り強く教えてくれる先生や地域の人たちがいて、できたことをほめて励ましてくれる学校
- ・ 子供たちが当番や係、委員会などの仕事にすすんで取り組み、手本となって働く上級生やクラスメイトがいて、いっしょに頑張れる学校

◎ みんなに会えるから楽しいと思える学校

- ・ 子供たち一人一人の居場所があり、おもしろいこと、楽しいことがたくさんある学校
- ・ クラスがいじめや暴力のない楽しい場所になり、一人がみんなのことを思い、みんなが一人のことを思いやることのできる学校
- ・ 先生たちがいつも子供たちのそばにいて温かく見守り、楽しいときも、悲しいときも、子供たちの心に共感してくれる学校

◎ いろいろな人からいろいろなことが学べる学校

- ・ おもしろい授業や行事、体験教室、スポーツ活動、集会など楽しい活動がたくさんある学校
- ・ 先生たちや地域の方々が、めあてをもって学習や生活に取り組む子供たちを見守りながら、いろいろなことを指導してくれる学校
- ・ 子供たちが、先生や友だちの応援を受けて、興味のあることやできないことにも挑戦することができる学校

○ 社会に開かれた教育課程の実現のための具体的な取組

① 「積極的な情報発信と情報の共有」

～積極的な情報発信～

- ・ tetoru 活用による電子版の手紙、必要十分な随時のお知らせの発行
- ・ HP の活用「学校日記」、「給食ニュース」等・配信メールによる細やかな連絡
- ・ クラスルームの活用、・個人情報の取り扱い許可を保護者と交わす
- ・ 保護者などとの迅速丁寧かつ積極的な報告連絡相談

～積極的な公開の実施～

- ・ 年2回の個人面談(7月、12月)と、年3回(4月、9月、3月)の保護者会の実施
- ・ 毎学期の授業公開の実施(6月、9月、2月)
- ・ 行事等の公開(運動会、つるっ子発表会(作品展)、入学式、卒業式、書き初め展等)
- ・ 授業や行事へのボランティア・参観者としての保護者、地域の方の招待(木の実工作、昔遊び、10歳の誓い、卒業コンサート、連合音楽会事前発表、歩行訓練、セーフティ教室、読み聞かせ、ミシン補助等)

② 「地域との協働体制の確立」

～学校運営協議会との協働～

・年4回の学校運営協議会の実施(4月、10月、1月、3月)

・研究授業、授業公開、各行事等の参観による、助言

～地域人材、外部団体を活用した授業や行事の積極的な実施～

・地域学校協働活動の計画的な実施と記録

・地域への貢献活動の実施(地域の方への発表、行事への招待、ランタン提供、落ち葉集め等)

・地域・保護者ボランティアによる、登下校見守り、花壇整備

(3) 重点目標③ — 【目指す教師像】

～ 子どもの成長は教師自身（自分自身）の喜び = 子ども中心主義の考え方で
互いに認め合い、支え合い、学び合いながら、
すすんで子供たちと関わる教職員

— 子供たちにとって、一番の理解者になるためにめざす3つの教師像 —
【具体的な教師イメージ】

◎ 子供たちのお手本になれる教師

— 教師の背中を見て子供は育つ

- ・ 誰に対しても公平でやさしく、思いやりにあふれている教師
- ・ どんなことにも一生懸命で、言ったことは最後までやり通す教師
- ・ いつも誰に対しても明るく、元気にあいさつができる教師

◎ 個に寄り添い、肯定的な児童理解に努める教師

— 関わりなくして理解は進まない

- ・ 子供たちとの距離が近く、積極的に子どもたちの中に飛び込んでいける教師
- ・ 様々な言動の裏に潜む子供たちの心理に、常に敏感な教師
- ・ 一人ひとりの違いを認め、広く多面的な視野で子供を理解しようとする教師集団

◎ 子供目線で物事を考えられる教師

— 大人の理屈を押し付けない柔軟な対応

- ・ 何よりも子供たちの声に耳を傾け、それぞれの思いに気付ける教師
- ・ 教師としての経験を活かしたり、いつでもリセットしアップグレードしたりできる教師
- ・ 同じ視点に立って子供たちを導き、子どもの世界観を大事にできる教師集団

○児童に充足感を与える支援と、良い行動を導く気配り

最近の児童は、自らが受容され、愛され、満たされているという満足感を得られずに、愛着行動を求めることが多く見られる。そのため、学校生活においても、そのような児童に対する受容感を与える接し方をすることが不可欠である。指導において、時に厳しさも必要ですが、厳しく叱られることや罰を与えられることに慣れてしまっている児童も多い。管理一辺倒の厳し過ぎる対応は、期待する効果は得られず、むしろ教員との良好な関係を阻害することになりかねない。

○個別の支援や優しさに対する感謝の気持ちから自主性の育成に

教師から助けてもらった、手伝ってもらったという感謝の気持ちは、教師に対する信頼だけでなく、児童自身の自主性にもつながるものと考ええる。ただ単に児童を注意するのではなく、教師はまず先にその児童の良さを認めながら、同時にその児童に合った支援を考えることが肝要である。個々の教師がこのような考えのもとで、学年・学級の枠組みにとらわれず、積極的にコミュニケーションを図りながら、支え合い、協力し合う職員室づくりを目指したい。

○学年全体を学年の担任だけでなく、副担任・専科・サポートルームの先生と連携して進める学年経営

学年会は、定期的に専科やサポートルームの先生を加えて実施し、必要に応じて校長・副校長など管理職も加わりながら、教職員の総力を挙げて行うものとする。

学年集会・学年体育を基本に、中学年からは学年での実行委員制度も取り入れて、児童自身が同学年のすべての友達のことを考えながら話し合いを進めさせ、自分たちで目標を設定して、自分たちの言葉で語り合い、自分たちで振り返り、評価、反省するという一連の流れを確立していきたい。

○誰からも信頼され、頼りにされる包容力と調整力のある管理職

学級経営の基盤が、確かな児童理解に基づく信頼関係にあるように、校長・副校長自らが、児童、保護者、教職員、地域の実態をよく知ることが学校の安定につながる。管理職が、日々起こる問題を未然に防止する方策を提案し、具現化するとともに、問題発生時には、それぞれの気持ちを受容的に受け止め、解決する包容力と調整力をもたなくてはならない。学校生活や家庭生活、地域生活の中で起こるトラブルにも、最善の解決策を提案、調整することができるよう努める。

(4) その他の目標 ―【特色ある教育】

「一人一人の違いを受け止め、良さを伸ばして成長に繋げる特別支援教育」

○「特別支援教育の充実」のための具体的な取組

- ・授業のユニバーサルデザイン化
- ・校内委員会による、支援方法の共有・検討
- ・サポートルーム教員、家庭と連携
- ・校内研修会の充実
- ・サポートルーム、特別支援学級の制度や手続きの年度初めの周知

○特別支援教育の実践から、「個別最適な学び」と「協働的な学び」との往還による充実した指導

サポートルーム（特別支援教室）における、特別支援教育の専門知識や指導法、児童との関わり方などを学び、密な情報共有を図りながら、一人も取り残さない指導を、通常学級での実践に活かしていく。学校全体から、特別支援教育に対するマイナスイメージの先入観を取り去り、「できないことが目立つのではなく、できることをほめて伸ばしていく特別支援教育の良さ」を学校全体に拡げ、どの児童も、その子の「いま・ここ」の実態に適した教育が受けられる学校を目指していく。

○児童の適性に合わせたユニバーサルデザインによる授業改善と、計画的な適応指導等による連携

通常の学級の担任とサポートルーム（特別支援教室）の教員が連携し、ユニバーサルデザインの視点に基づいた指導力の向上を図りながら、計画的に適応指導を行う中で、PDCAを繰り返し、学級の中の配慮を要する児童に対して、自然にお互いを認め合いながら成長する環境を作っていく。インクルーシブ教育の妨げになるような差別意識をもたせないように、細心の注意を払いながらトラブルを未然に防ぐとともに、課題があるときには、双方の担任が加わって丁寧に解決していく。